

思いを伝える情報発信で 保護者と「つながる」園をつくる

園がどのような考えのもとで保育を行っているかを
よりわかりやすく保護者に伝えることは、保護者の協力を得て保育を行い、
園をよりよい場とするための有効な手段です。

インタビュー

エピソードとプロセスで、園の「見える化」を

保護者に対して積極的に情報を公開し、交流を深めているにもかかわらず、
保護者対応の難しさを実感している園も少なくありません。保護者との関わりを考えるうえで、
何がポイントになるのかを子育て支援に造詣が深い大豆生田先生にうかがいました。

難しくなってきた保護者とのコミュニケーション

子育てを取り巻く状況が 大きく変わったことが要因

近年、「保護者とのコミュニケーションが難しくなった」という保育者の声をよく耳にします。これは、
マスコミで紹介されるような意思疎通が極端に難しい保護者が増えた
からなのではないでしょうか。私はもっと

社会的な、別の理由があると考えて
います。

そもそも、子育てを取り巻く状況
はこれまでと劇的に変わっています。核家族化で両親の育児の負担は
大きくなり、さらに共働きの家庭が一般的になったことで、結果的に保
護者の子育ての苦労は増えています。また、少子化の進行で、保護者



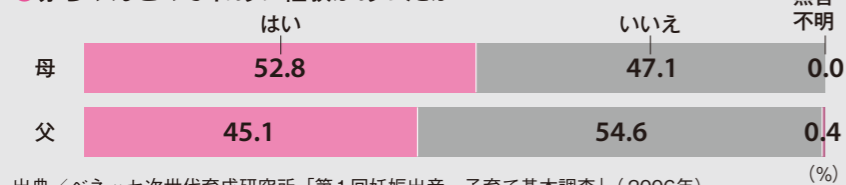
玉川大学教育学部
乳幼児発達学科准教授
大豆生田啓友

おおまめうだ・ひろとも
専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。著
書に、「これでスッキリ! 子育ての悩み解決
100のメッセージ」(すばる舎)、「よくわかる子育
て支援・家族援助論」(ミネルヴァ書房)など。

保護者の現状 赤ちゃんとふれあう経験がないまま親に

ベネッセ次世代育成研究所が行った調査では、「子どもの頃から今まで(第一子
を妊娠/出産するまで)に赤ちゃんと身近に接したり、世話をした経験があった」
という保護者は、母が52.8%、父が45.1%であった。母・父ともに約半数の人が
赤ちゃんとふれあいの経験がないまま親になっている。

●赤ちゃんとふれあひ経験があったか



出典/ベネッセ次世代育成研究所「第1回妊娠出産・子育て基本調査」(2006年)

の子育てのスタイルは「一児豪華主義」になり、わが子への期待は高まりがちです。その分、園に対する要望も多様で、大きなものとなつていき、それが叶わないと不満も高まります。

つまり、これまでは家庭や地域でなされていたことが十分に行われ

なくなり、さらに「保育のサービス化」という社会的な風潮によって、園に多くのことが求められるようになってきているのです。加えて、近所に子育ての悩みを打ち明けられる人がいないなど、保護者の孤立化も進んでいます。

園と保護者のコミュニケーション

ンが難しくなったのは事実だとしても、その原因を目の前の保護者にだけ求めるのは適切ではないと思うのです。むしろ、保護者が変わったというよりも、子育てを取り巻く社会全体が変化したのだと、私たちは認識すべきだと考えています。

園は、何をしているかわからない「ブラックボックス」!?

保育の「プロセス」を 保護者に伝える

このような中で、園と保護者が円滑にコミュニケーションしていくためのひとつの方法としては、園からの情報発信の仕方を見直す必要があるでしょう。

幼児教育の現場で働いていたひとりとして、私も以前は、保育者が一生懸命にやっていること、そしてその意図や情熱が保護者に必ずしもきちんと伝わっているとは限らないと感じることがよくありました。園として、またひとりの保育者として、保護者に情報を発信しているはずなのに、子どもの様子や保育者の考えが伝わっていないのはなぜでしょうか。

それは園からの情報が、どんな行事・活動を行っているかといったものが中心になっていて、子どもがどんなことを経験し、保育者がそれのように働きかけ、そして子どもはいかに成長しているかなど、保護者が本当に知りたいことが十分に伝えられていないからではないでしょうか。園での出来事が表面的に

しか伝えられていないため、園で行われている保育の意味が保護者には実は見えていないのです。いわば、園が「ブラックボックス」になっていることが少なくない気がします(下の「私の失敗談」参照)。

園の保育の意味がわからないままだと、例えば運動会でも、保護者

の関心は練習を通じた成長のプロセスには向かわず、「うまく走れたか」「お遊戯ができたか」という結果にしか向かいません。保護者は、運動会を単なるイベントとしてしか理解できていないのですから、それは当然のことです。

しかし実際には、運動会本番まで

大豆生田先生が 振り返る 私の失敗談

成長プロセスを保護者に語っていなかった

私が保育者として現場にいたときの話です。注意深く関わっていたある子どもが、園で昆虫をたくさん捕まえました。自分の方で遊びをつくることができたことがとてもうれしくて、私はお迎えにやってきた保護者に「こんなに虫を捕まえたんですよ!」と見せました。ところが保護者から返ってきた言葉は「え? それを家に持って帰らないといけないんですか?」という一言。

子どもがどんな気持ちで昆虫を捕まえたのか、保護者はなぜわからないんだと、そのとき私は怒りに震えました。でも、時間が経って振り返ってみると、実は悪いのは私だと気づいたのです。というのも、入園してから、その子自身がどんな状況で困っていて、それに対して私がどう関わってきたのか、保護者にしっかりお話ししていなかったからです。

私にとっては子どもの成長の証だったのに、保護者の目にはただの昆虫にしか映らなかったのです。それは、私の情報発信が不十分で、保育をブラックボックスにしていたからなのです。



に子どもたちは一生懸命練習し、友だちを助けたり、アイデアを出し合ったりしながら、実に豊かな時間を積み重ねてきています。このような運動会本番までのプロセスを園が保護者に伝えていなければ、保護者の関心はわが子の当日の出来不出来にしか向かいません。

保育者はどんな働きかけを行い、子どもたちがどんな成長を遂げてきたのか、そのプロセスをきちんと伝えていけば、同じ取り組みを見ても、保護者の意識は大きく違ってくはず。「今回の運動会の見どころ」などと題して、プログラムや園だよりなどで事前にお知らせするのもひとつの手段です。子どもたちがこだわって練習してきた点を写真やイラストなどを使って紹介

すれば、より保護者に伝わりやすくなるはず。

多くの園では今、さまざまな手段で情報発信を積極的に行っています。情報発信のツールの特性を生かしながら、プロセスをしっかりと伝えていきたいものです。

子どもの「エピソード」があって初めて納得できる

保護者とのコミュニケーションの際に、もうひとつ大切にしたいのが、エピソードを盛り込むことです。

例えば、自分の子どもは友達づきあいもうまくできていないのではと心配している保護者に、保育者が「3歳児はひとり遊びや並行遊びが多いものです」と言ったとしま

す。確かにそれは事実でしょう。でも、きっと保護者の心配はなくなりません。「そうはいつでも、ほかの子は友だちと遊んでいるではないか」と思ってしまうものなのです。たとえ正論であっても、一般論のまま述べては保育者の考えは保護者の心には届きません。

大切なのは、保育者だからわかる子どもの成長のエピソードが盛り込まれているか、そして、今後の見通しと保育者がどう関わろうとしているかを語っているかです。これらがあって初めて、保護者は自分の子どもをちゃんと見てもらっていると思うことができ、安心できるのです。

子どもの変化や成長など、日々のエピソードを交えながら、今後の見通しや自分の思いを語るのは、子どもを間近で見ている保育者だからできることです。「大丈夫ですよ」「元気ですよ」で片付けてしまっただけでは、保護者はかえって不安になってしまうかもしれません。保育者は当然だと思っていることでも、具体的なエピソードがあってこそ、保護者に伝わるのです。

プロセスとエピソードを大切にされた情報発信は、保護者が子どもをこれまで以上に理解することにも役立ちます。保育者は、園の遊びの中で子どもがどれほど成長しているか、さまざまなエピソードをもっていますから、それを保護者に伝えることで園への信頼感は高まりますし、家庭とは違う子どもの見方を知るでしょう。その結果、家庭での子どもへの接し方も変わってくるはず。

保護者を対等なパートナーとして見る

保護者が安心できる雰囲気をつくる

保護者とのコミュニケーションがうまくとれている園を見て感じるのは、「保護者を対等なパートナーとして見ている」ということです。

例えば園の行事への参加を募るときも、保護者一人ひとりの意向や個性を尊重し、保護者も行事を楽しむことができるように配慮しています。それぞれの保護者の事情や得意不得意を考慮せず、「親なんだからこれくらいやって当たり前」と、園の一方的な思い込みでつくられた行事は保護者には苦痛ですし、今後の参加には結びつきません。

子どもと同様、保護者の主体性や個性を尊重し、保護者一人ひとりも輝かせながら園と一緒に歩いていくという気持ちをもつことが大切なのではないのでしょうか。

また、子どもに対してそうであるように、保護者一人ひとりに対して肯定的なまなざしを向けることも必要でしょう。「毎日の仕事がいへんな中で、慣れない子育てをよくがんばっていますね」と寄り添うことも大切です。

園が「コミュニケーションが難しい」と思っている保護者は、保護者自身も園からよく思われていないかもと薄々気がついているものです。「自分はちゃんと子育てができていない」「園は自分にお説教したいはず」などと身構えて、園に対して関わりたくないと思っている傾

大豆生田先生が考える保護者との関係づくり4つのステップ

保護者との信頼関係が構築できていない段階で、「お子さんに朝ごはんをちゃんと食べさせてきてください！」などというと、保護者は心を閉じてしまいます。保護者との関係づくりは、この4つのステップで考えるとよいでしょう。

- 1 園や保育者が安心できる場や人であると感じられる雰囲気を作る
- 2 先生に気軽に話せる、話しかけられてもいいという信頼関係を構築する
- 3 原則的には保護者自身から悩みをもちかけてもらう。それが無理ならば、「最近どうですか？」と話しかけてみる
- 4 保護者から話を聞き、どう解決するかを一緒に考え、具体的なアプローチを行う

コミュニケーションがうまくできていないと感じるときは、1、2のステップがきちんとできているかどうかを確認してみましょう。

向があります。

このような保護者に対しては、まず保護者が安心して園と話ができる雰囲気をつくっていただきたいと思います。コミュニケーションが難しいと感じる保護者にこそ、相手を身構えさせないよう、どうか明る

く、元気に、笑顔で声をかけてください。送迎時の声かけや、連絡帳でのコミュニケーションを通して、「応援していますよ」という保育者の思いをわかってもらうことが、保護者との関係の土台になるのです。

現場のみなさんへ

社会状況の変化から、今、園には多くのことが求められています。現場の保育者のみなさんのご苦労を想像すると、頭が下がる思いです。そんな中で保護者とのコミュニケーションを充実させていくのは、大変だと思われるかもしれません。しかし、家庭の存在を抜きにしてこれからの幼児教育は考えられません。幼児教育は、その成果がすぐには見えにくいものです。だからこそ、園で行われていることを「見える化」して、保護者の賛同と協力を得ていくことが大切だと思います。子どもの成長の様子をしっかりと伝えて、保護者とともに子どもを育てていく園であってほしいと思います。

園からの情報発信のねらい

◎園の考えや保育者の思いを伝える

一人ひとりの保護者とじっくり話をする機会は意外に少ないものです。園全体の理念や方針、園長や保育者の考えを伝えることも必要です。

▶▶▶情報発信の手段の例→園だより、クラスだより

◎保育の様子をよりイメージしやすく伝える

保護者が最も関心を寄せているのは、クラスの中で日々子どもたちはどのように過ごしているかです。子どもたちの表情や、保育者の関わりなどが具体的にイメージできるような情報発信が求められます。

▶▶▶情報発信の手段の例→園の掲示板、クラスだより、ホームページ、ブログ、写真掲示、ドキュメンテーション

◎保育を体験することで保護者が子どもを理解する

保育者の子どもへの関わりかたや遊びの中での学びを知ることは、保護者にとって自分の子育てを見直すきっかけにもなります。保育の現場を見て、保護者にも実際に保育に参加してもらうことも、情報発信のひとつです。

▶▶▶情報発信の手段の例→保育参加、行事での保護者参加、サークル活動

◎双方向のやりとりで、保護者と信頼を深める

子育ての経験が乏しく、周囲に相談ができる人も少ない保護者の疑問や不安は、日々変わっていきます。送迎時に子どもの1日の様子を伝えるだけでなく、保護者が疑問や不安を気軽に打ち明けられるツールも必要です。

▶▶▶情報発信の手段の例→連絡帳、個人面談、保護者とお茶会